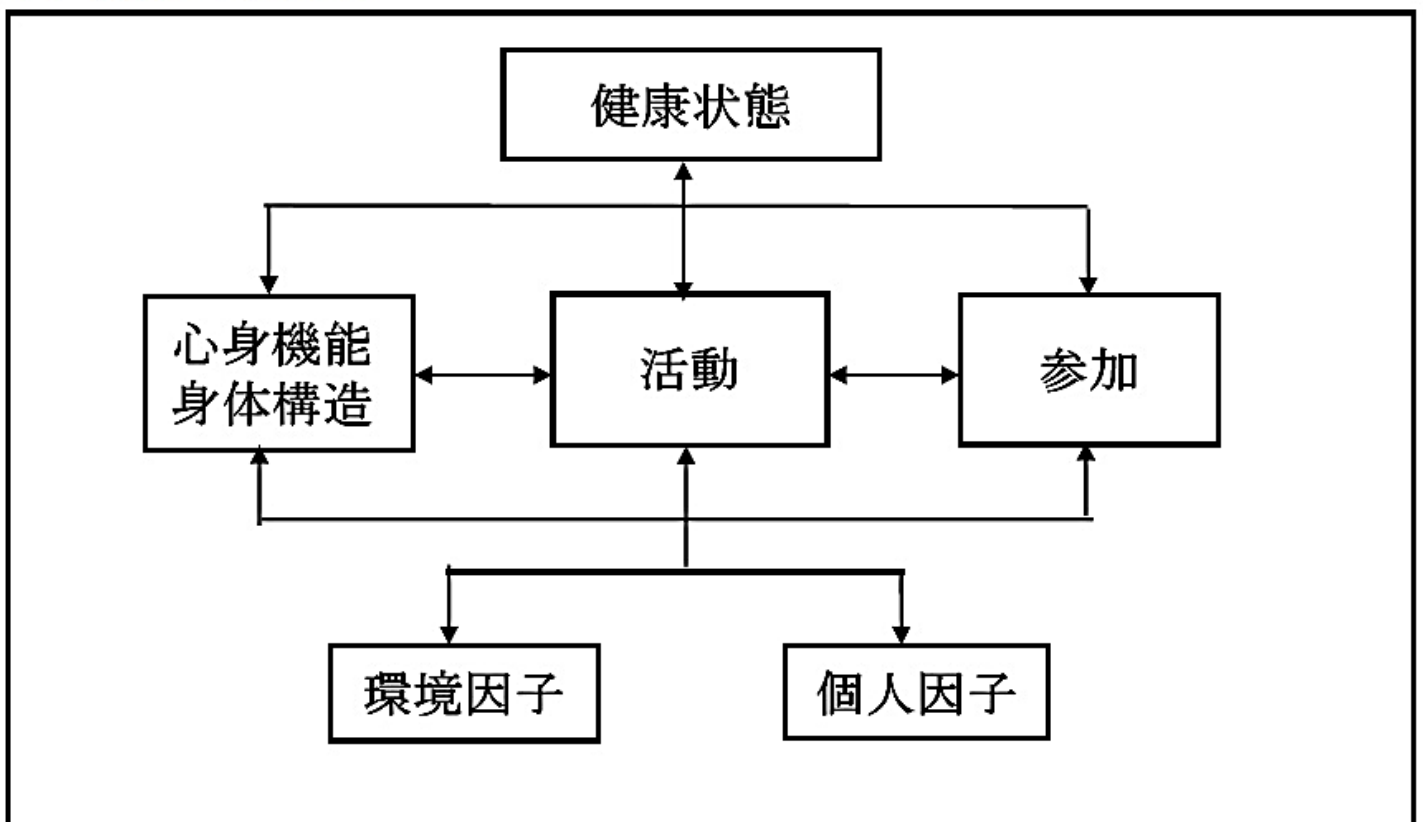


(介護過程) ICF 解説

① ICF の考え方

ICF とは、疾病を起点とした「医学モデル」と併せて、個人のもつ歴史や属性、社会的関係や物的環境なども個人が生きていくうえでの能力の発揮や社会的不利に関連しているとする。「社会モデル」を障害の概念として含む「医学モデルと社会モデルの統合モデル」である。さらに ICF はそれぞれの視点におけるマイナス面だけでなく、プラス面にも着目する。

② ICF の整理チャート



ICF 構成要素の定義

健康状態	: 利用者の抱えている病気や怪我、変調を意味する。
心身機能・身体構造	: 心身機能とは、身体系の生理的機能（心理的機能を含む）であり、身体構造とは器官・肢体とその構成部分などの、身体の解剖学的部分である。
活動	: 課題や行為の個人による遂行のことである。
参加	: 生活・人生場面へのかかわりのことである。
背景因子	個人因子 : 個人の人生や生活の特別な背景であり、健康状態や健康状況以外のその人の特徴からなる因子である。
	環境因子 : 人々が生活し、人生をおくっている物的な環境や社会的環境、人びとの社会的な態度による環境を構成する因子である。

上記で述べた背景因子には、**促進因子**と**阻害因子**という因子が存在する。

促進因子 : ある人の環境において、それが存在しないこと、あるいは存在することにより、生活機能が改善し、障害が軽減されるような因子をいう。

阻害因子 : ある人の環境において、それが存在しないこと、あるいは存在することにより、生活機能が制限され、障害を生み出すような因子をいう。

個人因子と**環境因子**の位置づけ

個人因子と環境因子の基本的理解はアセスメントにおいて行われる。アセスメントに基づいた実施において、その因子がどのように変化し、「活動・参加」に影響を与えているかについては、実施から評価の段階でみることができる。個人因子と環境因子に位置づけは、基本的にアセスメントから出発して、2段階に分けて考えることができる。

展開過程における個人因子と環境因子

段階		問題とする事柄	個人因子と環境因子 (阻害因子・促進因子)
第 1 段 階	相談・面接 アセスメント プランニング	これからどのようにして生活課題を解決していこうとするのかという状況の理解と、今後の方向性の問題	アセスメントの対象となる個人因子と環境因子を計画においてどのように活かして使うか。目標は因子の変化の可能性。
第 2 段 階	実施 モニタリング 評価	実施の結果の見守りから評価へ。状況と、結果はどうであるかという問題	実施によって各因子がどう変化してきたのか、因子の統合化の過程をみる

[図1] ICFを取り入れた支援過程

